

福島県環境創造センターにおける 人材育成講座について

～ふくしまの現状理解と復興促進のために～

福島県環境創造センター 技師 橋本 晃 佑

1. はじめに

福島県環境創造センターは、2011年3月に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故による災害からの環境回復を進め、福島県民が将来にわたって安心して生活できる環境を創造するための拠点として福島県が整備し、2016年7月に全面開所した施設である。環境創造センターは、環境放射能のモニタリング、環境回復・創造に向けた調査研究、原子力災害を経験した福島に関する情報の収集・発信、福島県の復興に向けた人材の育成等の役割を担っている。

原子力発電所の事故により、福島県は農林水産業、観光業等あらゆる産業で大きな打撃を受けるとともに、避難者が避難先でいわれのない差別的な扱いを受けるなど道徳的な面からの被害も受けてきた。県民の懸命な努力や福島の今や魅力が伝わる情報発信の取組などにより、福島の復興は着実に前進しているが、根強く残る福島に対する風評や時間の経過とともに増える無関心が未だ福島県民を苦しめており、また、



図1 福島県環境創造センター外観

原子力発電施設の廃止措置にはこの先数十年を要するとも言われている。そのような風評払拭や風化防止、福島復興に向けた人材育成への対応として、環境創造センターでは、各年齢層を対象とした各種講座を開設しており、そのいくつかについては第27回全国科学博物館協議会研究発表大会で報告したところである。

2. 福島県環境創造センターにおける人材育成講座について

環境創造センターにおける各種人材育成講座の概要は次のとおりである。

1) 理科自由研究発表会 at コミュタン福島

小学校児童の夏休みの課題の一つである理科自由研究の成果に関する発表会を開催することで、研究成果を広く発信するとともに、児童の科学への探究心の喚起及びプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的に、小学校1年生から6年生までを対象として、2018年度から開催している。参加者は、200名収容のホールで5分程度の口頭発表をした後、ポスターセッションにおいても研究成果の発表をする。大勢の観客の前での発表を経験することによる児童の成長は本発表会における目標であるが、他の児童の研究に触れることや研究テーマが近い児童間での意見交換、研究成果をポスターにまとめる作業を経ることによる自身の研究についての振り返りなども、本発表会の成果と言えると考えている。



図2 理科自由研究発表会（口頭発表）

2) コミュタンサイエンスアカデミア

小学校4年生から中学校3年生までを対象とした、「科学への興味喚起」、「原子力災害を経験した福島の状況理解」そして「情報発信への意識醸成」を目的とした講座であり、2019年度から開設している。年間を通じた全12回の講座で、「科学のあたまは自分で育てる」をテーマに、科学だけではなく地域課題など様々なことを学ぶ。ちなみに、「コミュタンサイエンスアカデミア」の「コミュタン」は、展示やドームシアターなどが整備され、情報発信や人材育成の機能を担う環境創造センターの一施設である交流棟の愛称「コミュタン福島」から取られている。



図3 コミュタンサイエンスアカデミア
ワークショップ

3) ふくしまサイエンスコミュニケーター養成講座

原子力災害を経験した福島の現状等を科学的視点で伝えることができる人材の育成のため、高校生以上を対象とし、2017年度から開設している。高校生、大学生、博物館職員、定年退職者など様々な年齢層や立場の方々が受講生となっており、その多様性を活かした交流活動が展開できることが本講座の特徴の



図4 サイエンスコミュニケーション
実践活動

一つとなっている。

4) ふくしまナラティブ・スコラ

高校生一人ひとりがそれぞれの視点で語るべきことを構築する「ナラティブ型」のプレゼンスキルの習得と福島についての理解促進を目的に 2020 年度から開設している。詳細については、次項に記載する。

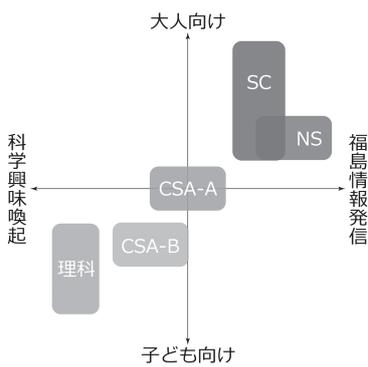


図5 各講座の位置づけ

- ・理科自由研究発表会 at コミュタン福島（理科）
対象：小学校 1 年生から 6 年生まで
- ・コミュタンサイエンスアカデミア Basic コース（CSA-B）
対象：小学校 4 年生から小学校 6 年生まで
- ・コミュタンサイエンスアカデミア Advanced コース（CSA-A）
対象：中学校 1 年生から 3 年生まで
- ・ふくしまサイエンスコミュニケーター養成講座（SC）
対象：高校生以上
- ・ふくしまナラティブ・スコラ（NS）
対象：高校生

3. ふくしまナラティブ・スコラについて

1) 背景

原子力発電所の事故から間もなく 10 年を迎える中、福島県内では放射性物質を生活環境から取り除く除染作業や被災地域の生活基盤整備等により避難者の帰還が進むとともに、福島イノベーション・コースト構想に基づく新たな産業集積と交流人口の拡大のための様々な取組が進められている。併せて、行政は復興の進捗状況や県内の生活環境の放射線量などの客観的な情報を様々な方法により発信している。

一方で、福島県の現状に関する理解については、必ずしも進んでいる訳ではない。例えば、2020 年に民間シンクタンクが実施した福島県に対する東京都民の意識調査の結果では、福島県への旅行について「自分が訪問する場合、放射線が気になるのでためらう」と約 2 割の都民が回答している。

このように、客観的な情報の発信のみでは意識を変えることは困難な場合もある。このような状況を打破し福島に対する理解を促進させるためには、客観性に主観性を加えて対象者に訴えることが有効なのではないかという想いで開設した講座が「ふくしまナラティブ・スコラ」である。

2) ふくしまナラティブ・スコラ概要

ふくしまナラティブ・スコラは、県内高校生を対象としている。高校生のメッセージは力強く、また、説得力がある。発災した2011年に開催された第35回全国高校総合文化祭「ふくしま総文」において福島県の高中生達が上演した構成劇のセリフ「福島に生まれて、福島で育って、福島で働いて、福島で結婚して、福島で子どもを産んで、福島で子どもを育てて、福島で孫を見て、福島でひ孫を見て、福島で最期を過ごす。それが私の夢なのです。」は、当時の首相の所信表明演説で引用された程の大きな注目を集めた。そんな高校生のプレゼンテーションにより、福島



図6 ふくしまナラティブ・スコラ
イメージビジュアル

島の状況について多くの方々に伝わり、理解していただくことが期待できる。聞き手に想いが伝わるプレゼンに向けて、ふくしまナラティブ・スコラでは、プレゼンテーションの専門家等によるワークショップを経て、プレゼンテーション大会を実施する。

さらに、事前のワークショップやプレゼンテーション大会の様子を伝える映像番組を制作し、テレビやウェブサイト等のメディアを活用して県内外に広く発信することまでが、ナラティブ・スコラの一連の流れとなる。

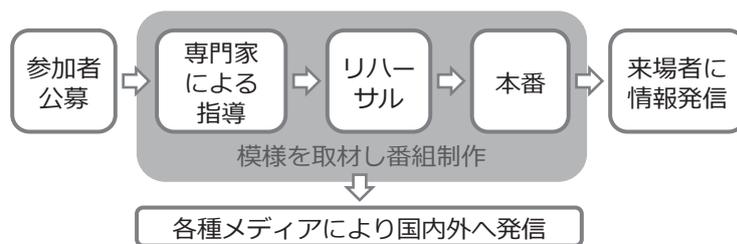


図7 ふくしまナラティブ・スコラ事業構造

3) 受講者

本講座は高校生を対象としている。本講座初年度の2020年度には、20名程度の定員に対し、応募のあった県内各地の高校生46名から22名を選定した。応募動機は「県外における福島への誤った理解を正したい。」や「ふくしまの魅力を伝えたい。」、「人前で話をするのが苦手なのでそれを克服したい。」など様々であった。

4) ワークショップ

表1のとおり全9回11日間に渡る事前ワークショップにおいて、スライドのデザイン方法やボイストレーニング等の技術的なトレーニングを行うだけではなく、原子力災害を経験した福島に関することや客観的視点と主観的視点の使い分け等について学ぶことにより、聞き手に想いを伝える手法、特に一人ひとりが主体となって語る表現技術（ナラティブ）の習得を目指していった。



図8 ふくしまナラティブ・スコラ
 ワークショップ

表1 ふくしまナラティブ・スコラの事前ワークショップカリキュラム（2020年度）

第1回（7月）	伝えることの楽しさ、難しさを体感するワークショップ 「発表」と「プレゼン」の違い
第2回（8月）	ふくしまの現状のおさらい。自分の「物語」を考える 科学的（客観的）視点と主観的視点の使い分けを意識する
第3回（8月）	誰かの物語を聞き、意見交換 さまざまな視点での「9年間」を体感し、自分に落とし込む
第4回（9月）	[集中講義（3日間）] 「声」、「ことば」、「呼吸と姿勢」の表現力を学ぶ PCスキルアップ講習会
第5回（9月）	プレゼンテーション練習会① 伝え方（How to say）を考える
第6回（10月）	プレゼンテーション練習会② プレゼンテーション資料の作り方、活かし方
第7回（11月）	プレゼンテーション練習会③ 自分自身が伝えたい「念い（おもい）」をプレゼンテーションする
第8回（11月）	サイエンスアゴラ見学（オンライン） 「伝えたい」の熱意と工夫を体感
第9回（11月）	プレゼンテーション練習会④ 自分自身が伝えたい「念い（おもい）」をプレゼンテーションする

5) プレゼンテーション大会

2020年7月に開始したワークショップを通じて、22名の受講生はプレゼンテーションスキルを学びながら、2011年3月の震災から現在までの自分を振り返り、そして、震災と自分自身に真摯に向き合ってきた。2020年12月、福島県郡山市内のイベントホールで開催されたプレゼンテーション大会「ふくしまの高校生が伝える ナラティブ・プレゼンテーション」では、受講生が一人ずつステージに立ち、震災からこれまでに経験したこと、学んだこと、

悩んだことに触れながら「自分のいまの念い（おもい）」を等身大の言葉で語った。会場の参加者からは、「今後は、自分自身が福島についての情報を発信していきたい。」「改めて福島に向き合い、自分にできることから始めたい。」「復興とは何かについて考えさせられた。」などの感想が寄せられた。多くの参加者にとって、これからの福島について考え、行動するためのきっかけになったのではないかと思う。

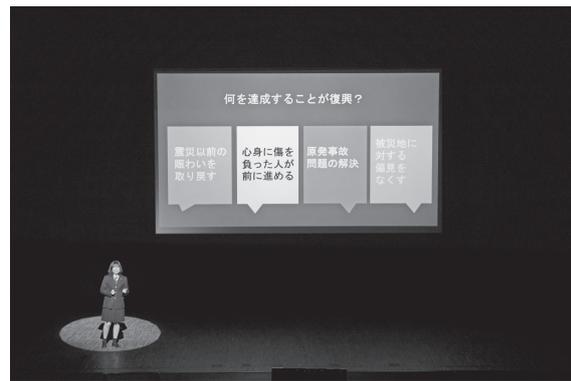


図9 ナラティブ・プレゼンテーション

6) 活動報告

5) のプレゼンテーション大会は、主に福島県内向けの情報発信であり、県外に向けては、制作番組のテレビ放映やウェブ配信により行う予定である。

[テレビ放映]

- ・ 放映時期 2021年2月下旬
- ・ 放映エリア 首都圏及び福島県

[ウェブ配信]

- ・ 配信開始時期 2021年2月上旬
- ・ URL <https://www.fukushima-kankyosozojp/fns/>

4. おわりに

各講座を通じて、受講生における科学やコミュニケーションについての考え方や、震災に向き合う姿勢や意識などの変化が見られる。それらの変化は、小さいものかもしれないが、講座後の受講生等の活動に繋がる何かになってほしいと願っている。様々な福島への風評は根強く残っており、また、原子力発電施設の廃止措置は、今後、長期にわたる課題として残り続ける。各講座をきっかけに、福島に想いを向け、「福島復興のために」という意識を持って行動するような人材に育つよう期待したい。